（別紙様式３）

令和４年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　愛知県名古屋市中区栄１－１４－３２
管理機関名　学校法人名古屋石田学園
代表者名　　石田　正城

令和３年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

令和３年４月１日（契約締結日）　～　令和４年３月３１日

２　指定校名・類型

学校名　　星城高等学校
学校長名　石田　泰城
類型　　グローカル型

３　研究開発名

『外国人市民と高齢市民が輝く新たな架け橋プロジェクト』
～新たなコミュニティーを協創できるスーパーグローカル・リーダーの育成～

４　研究開発概要

人との繋がりが希薄になりつつある地域社会において、地域課題の解決を目指した企画を共生・協働という観点から協創できる地域リーダーの育成を研究開発の目的とする。本校が立地する愛知県豊明市は外国人市民と高齢市民の増加が顕著で、それらへの対応が地域全体の大きな課題となっている。そのような現状を踏まえ、今回の研究開発では「外国人市民との多文化共生を推進する地域活動」と「高齢市民との安心・安全な健康生活づくりを協働する地域活動」を組み入れることにより、提言だけではなく、地域での活動や実践を重視したカリキュラムを開発する。　この活動の名称はスーパーグローカル・リーダー（Super Glocal Leader）育成活動とし、その略称は「SGL 活動」とする。そして、その課題探究テーマを「外国人市民と高齢市民が輝く新たな架け橋づくり」に設定する。また、地域協働コンソーシアムを構築し、『 Rainbow Bridge Project! - Think Globally, Act Locally - 』をスローガン掲げ、生徒の学びに主体的に関わる共同体にしていく。この地域協働コンソーシアムを活用し、生徒がグローバルな視点をもって地域課題の解決に取り組むグローカル探究のカリキュラムを研究開発する。

5　学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

・学校設定教科・科目　　開設している　　・　　開設していない

・教育課程の特例の活用　　活用している　　・　　活用していない

6　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
渥美榮朗	元愛知県教育長	学識経験者
寺田志郎	元愛知県教育委員会学習教育部長、元県立高校長会会長	学校教育に専門的知識を有する者
久野弘幸	名古屋大学大学院准教授	教育学研究者
月岡修一	豊明市議、学校評議員	有識者
小串真美	豊明市役所行政経営部長	関係行政機関の職員

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

〔多文化共生コンソーシアム〕

機関名	機関の代表者名
豊明市役所	市長　　小浮正典
豊明市教育委員会（市内小中学校を含む）	教育長　伏屋一幸
豊明市国際交流協会	会長　　石田英城
星城大学経営学部	学長　　赤岡　功
ARMS 株式会社	代表取締役会長　濱島正好
県立豊明高等学校	校長　　鈴木正博
豊明市商工会	会長　　伊藤 裕
豊明青年会議所	理事長　脇本　泰志

〔健康福祉コンソーシアム〕

機関名	機関の代表者名
豊明市役所	市長　　小浮正典
豊明市教育委員会（市内小中学校を含む）	教育長　伏屋一幸
豊明市社会福祉協議会	会長　　加藤　誠
星城大学リハビリテーション学部	学長　　赤岡　功
株式会社スギ薬局	代表取締役社長　杉浦克典
県立豊明高等学校	校長　　鈴木正博
豊明市商工会	会長　　伊藤 裕
豊明青年会議所	理事長　脇本　泰志

8　カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	該当者なし		
海外交流アドバイザー	古藪　真紀子	名古屋大学大学院国際開発研究科学術研究員	非常勤 (週 1 回程度)
地域協働学習支援員	古藪　真紀子	名古屋大学大学院国際開発研究科学術研究員	非常勤 (週 1 回程度)

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
協定書･契約書締結	○											○
コンソーシアム会議開催			○						○			
連絡協議会全国サミット			○							○		
コンソーシアム・市役所連携	○		○		○		○		○		○	
市議会連携						○	○	○				
予算執行	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（2）実績の説明

〔コンソーシアムの構築、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の配置〕

名古屋石田学園と豊明市が長年に渡り築き上げてきた信頼関係をもとに､本事業への協力について､豊明市やコンソーシアム構成団体と定期的に協議を重ねてきた。コンソーシアムについてはすべての構成団体と協定書を締結し、海外交流アドバイザー兼地域協働学習実施支援員については 1 名と契約を結んだ。

〔管理機関による主体的な取組〕

2 か月に 1 回程度、豊明市長または市役所幹部職員、そしてコンソーシアム構成団体の各代表者と本事業についての意見交換を行った。また、各学期に 1 回、コンソーシアム会議を開催し、地域との協働による学びの計画や実践内容、結果について協議した。探究学習の中で市議会に関わる内容が生じた際は、市議会事務局や市議会議員に協力を依頼することで生徒を支援した。

〔国費に上乗せした独自の支援や取組〕

担任用 iPad や教室の wi-fi 設備、Zoom の年間契約などの ICT 環境を整備した。また、生徒が地域で活動する際に必要な市内交通費を負担した。

〔継続的な取組を行うための教員の人事面における配慮等〕

探究学習を統括する部署を設置し、コースごとに担当主任を配置した。また、開発会議と実行委員会を設置し､管理職が出席することで研究開発が円滑に進むように配慮した。担当主任は、午後の時間帯に地域の関係機関に出向いて、コンソーシアム関係者や地域住民と協議できるようにし、地域コーディネートの役割を担えるように配慮した。

〔事業終了後の自走を見据えた取組〕

予算規模は小さくなるが、研究開発指定期間終了後も引き続き管理機関が探究学習に係る予算を計上する。また、探究学習を統括する部署と実行委員会は存続し、担当者が地域コーディネートを担うための配慮も継続する。それに加えて、該当部署に新たに副主任の役職を設定する。

１０　研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
SGL 地域協創学Ⅰ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
SGL 地域協創学Ⅱ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
SGL 地域協創学Ⅲ	○	○	○	○		○	○	○	○	○		
JICA 開発支援 アラカルト講座		○				○						
オンライン 海外研修			○	○				○	○			
SGL 国内研修 （修学旅行）								○				
SGL 英語Ⅰ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
SGL 第 2 外国語	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
SGL 英語Ⅱ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
グローカル探究 オンライン発表会										○		

（２）実績の説明

〔研究開発の内容や地域課題研究の内容〕

【SGL地域協創学Ⅰ】

1年生の「総合的な探究の時間」をSGL地域協創学Ⅰ(2単位)とし、Think Globalでは世界共通の課題SDGsを通して学び、Think Localで豊明市の地域課題を学んだ後に、Act Localでは「花溢れる街づくりプロジェクト」を企画して地域住民との協働を経験した。そしてその経験のまとめと新たな地域協働活動の提言をつくり、ポスターセッションの形式で発表し合うことで、それぞれの経験や考えを全体で共有した。

【SGL地域協創学Ⅱ】

2 年生の「総合的な探究の時間」を SGL 地域協創学Ⅱ（2 単位）とし、Think Global では SDGs の理解を深め、Think Local で地域課題の情報収集をした後に、Act Local では「地域協創プロジェクト」を企画して地域課題解決を目指した啓発物の開発にコンソーシアム構成団体と協働して取り組んだ。このカリキュラムは、地元豊明市の地域課題解決につながる啓発物開発が主な学習内容となる。地域課題の一つである多文化共生推進を図る啓発物開発において、ベトナム人市民と協働してベトナム料理レシピのリーフレットや調理動画を開発し、学校 HP や豊明市広報誌などに掲載して一般市民に広報する学習活動を行った。高齢市民の健康促進を図る啓発物開発においても、豊明市健康推進課（健康センター）と協働して高齢市民用ヘルシーレシピを開発し、豊明市広報誌や豊明市 HP などに掲載して一般市民に広報する学習活動を行った。それぞれの活動では、実施に食材を調理し、その過程や完成状況を画像や動画に収めるとともに、完成した料理を協力していただいたベトナム人市民や高齢市民に試食してもらうことで、感想などをインタビューしてフィードバックを得る活動となった。

また、ボードゲームタイプの啓発物を開発する探究班の研究材料として、人生ゲームを使用し、該当するいくつかの班と共同で使用した。ボードゲームはどのような構成になっているか、どのような文言が使われているか、どのような工夫がされているか、どのくらい時間がかかる設定で作成されているかなどについて調査した。多文化共生推進を図る啓発物開発においては、外国人市民が日本の生活や豊明市の文化・名所を学ぶオリジナルボードゲームを開発し、子ども日本語教室で外国人児童に使用してもらい、感想などのフィードバックを得る学習活動となった。高齢市民の健康促進を図る啓発物開発においては、高齢者が子ども時代からの自分を年代ごとに振り返っていくオリジナルボードゲームを開発し、高齢者サロンや老人会などで取り組んでもらい、これまでの人生を振り返りながら高齢者同士の仲間づくりや認知症予防に良い影響を与えるかについてのフォードバックを得る学習活動となった。開発した内容や経緯についてポスターセッションの形式で発表し合うことで、それぞれのアイディアや成果などを全体で共有した。

【SGL地域協創学Ⅲ】

3年生の「総合的な探究の時間」をSGL地域協創学Ⅲ（1単位）とし、Think Globalでは自分の将来とSDGsのつながりを探り、Think Localでは大学生活の4年間で自分が関係する地域課題を検討した後に、3年間の探究活動の総まとめとして探究レポートを作成した。最終的に、探究レポート集を制作し、探究成果を広報することにつながった。

【SGL国内研修(修学旅行)】

ベトナム研修旅行の予定を宮崎・鹿児島研修(2泊3日)に計画を変更して実施した。研修のテーマは変更せず、「SDGsと地域づくり」で各市町村がどのように地域の特性とSDGsを関

連付けて地域活性化に取り組んでいるかを学ぶ2年生対象の宿泊研修である。この研修旅行はSGL地域協創学Ⅱのカリキュラムの中に位置づけられ、地元豊明市の地域課題解決につながる啓発物開発を主な学習内容とした。啓発物開発途中の段階でこの宿泊研修を設定することで、各市町村の取組から啓発物のアイディアについてのヒントを得たり、どのようにSDGsと地域づくりを関連付けているかを学んだりすることができた。それらをその後の啓発物開発に活かし、地元地域の課題解決につながる啓発物の完成に結び付けた。

訪問先	活動内容	地域と SDGs の関連
宮崎県日南市	【海の環境とサンゴ礁保護活動】 ビーチコーミング　海の環境学習 水中観光船　サンゴ礁・生物観察 シーカヤック　サンゴ礁・生物観察	SDGs 目標 12 「海の豊かさを守ろう」
鹿児島県桜島	【桜島の環境と火山灰の再利用】 桜島火山灰プロジェクト 桜島溶岩の状況理解と観光促進	SDGs 目標 11 「住み続けられるまちづくりを」
鹿児島県知覧	【平和と SDGs の関連】 知覧特攻平和会館　平和学習	SDGs 目標 16 「平和と公正をすべての人に」
鹿児島県鹿児島市	【SDGs 未来都市の現状】 「人・まち・みどり みんなで創る“豊かさ”実感都市・かごしま」の探索	SDGs 目標 8 「働きがいも経済成長も」 SDGs 目標 9 「産業と技術革新の基盤をつくろう」 SDGs 目標 11 「住み続けられるまちづくりを」 SDGs 目標 17 「パートナーシップで目標を達成しよう」

【SGL英語Ⅰ】

英語でのコミュニケーション能力向上を図るため、学校設定教科「SGL語学」の中に学校設定科目「SGL英語Ⅰ」を開設した。スピーキング技能とリスニング技能についての学習を中心に、英語で発表する力を養う学びとなった。

【SGL第2外国語】

当初想定していたベトナム研修旅行と地域でのベトナム人住民との交流に向けて、ベトナム語を学ぶ授業として学校設定科目「SGL第2外国語」を開設した。コンソーシアム構成団体の星城大学からベトナム人留学生を講師として3名派遣してもらい、ベトナム語の文字や日常会話、文化を学び、授業を受けた生徒は自己紹介ができるようになった。

【SGL英語Ⅱ】

英語で書かれた文献や資料などを読むことができる能力を身に付けるために、学校設定科目「SGL英語Ⅱ」を開設した。リーディング技能についての学習を中心に、英語を読むスピードと英語の文章を正確に読解する力を養う学びとなった。

〔地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け〕

1 年次の「総合的な探究の時間」では「SGL 地域協創学Ⅰ（2 単位）」を、2 年次の「総合的な探究の時間」では「SGL 地域協創学Ⅱ（2 単位）」を、3 年次の「総合的な探究の時間」

では「SGL 地域協創学Ⅲ（1 単位）」を教育課程内に設定した。また、学校設定教科「SGL 語学」において、1 年次には学校設定科目「SGL 英語Ⅰ（1 単位）」を、2 年次には学校設定科目「SGL 第 2 外国語（1 単位）」を、3 年次には学校設定科目「SGL 英語Ⅱ（1 単位）」を教育課程内に設定した。

〔各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組〕

「SDGsの達成」を共通語に、各教科・各科目でSDGsの17の持続可能な開発目標に関連する内容を授業内容に入れ込むことを目標とした。「総合的な探究の時間」では、SDGsに関して教科横断的に学んだことをもとに、多角的に考えながら学ぶことが目標となる。

〔地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメント推進体制〕

教育課程に関わる内容は SGL 開発部で立案し、SGL 開発会議で審議した内容を教育課程検討委員会に諮る。そこで決定した内容は管理機関で決済される。「SGL 地域協創学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業内容は SGL 開発部で立案し、SGL 実行委員会で各担任と共有する。SGL 開発部主任は定期的にコンソーシアム関係団体の代表者と打ち合わせを実施して活動内容を協議し、その内容を「SGL 地域協創学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業計画及び内容に反映させる。

〔学校全体の研究開発体制（教師の役割、それを支援する体制）〕

SGL 開発会議は校長、副校長、教頭、SGL 開発部主任で構成される。研究開発の内容や進捗状況を管理職と共有し、授業の実施や生徒の活動への参加について支障が出ないように支援する。SGL 開発部は授業内容の検討と指導案の作成に関して中心的な役割を担うとともに、授業が円滑に実践されるように各担任を支援する。SGL 実行員会は副校長、教頭、SGL 開発部主任、該当クラス担任で構成される。SGL 開発部会で立案された授業内容と指導案を共有し授業を実践する。SGL 開発部主任は SGL 開発会議・SGL 開発部会・SGL 実行委員会を運営し、授業を円滑に実施できるように校内調整する役割を担う。また、コンソーシアム構成団体の代表者や地域関係者と連絡を取り、校外活動を円滑に実施できるように調整する役割を担う。

〔海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け〕

海外交流アドバイザーと地域協働学習実施支援員を兼任で非常勤講師 1 名を配置した。「総合的な探究の時間」の実施時間には実施支援員として、その他では週 1 回程度、授業開発の支援員としての役割を担った。

〔学校長の下で進捗管理を行い、成果の検証・評価等を通じ、改善していく仕組み〕

「SGL 開発会議→SGL 開発部→SGL 実行委員会」という指示系統を明確にすることで方針を正確に現場に伝える。また、「SGL 実行委員会→SGL 開発部→SGL 開発会議」の順で実践状況を報告することで、進捗状況や成果、改善が必要な課題などを正確に共有することができる。各学期には、ルーブリック評価表による活動の自己評価を実施し、それを集計する。クラス単位・コース単位・学年単位で結果から生徒の育成状況を確認し、重点的に育成すべき観点を見つけることで、次学期の授業計画に反映させる。また、地域協働学習実施支援員と「地域協創学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業計画及び実施内容について定期的に協議し、「授業内容検討→授業実践→改善点の検討→次の授業内容検討」という PDCA サイクルの継続によって授業改善を進めた。

〔カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組〕

コンソーシアム会議において取組状況を共有し、それぞれについての評価できる点や改善

点などの助言をもらった。コンソーシアム構成団体の職員が授業で各クラス内に入って生徒へ講話をしたり、各探究班へ助言したりする。また、生徒が助言を求める際に、電話で対応したり、各団体に出向いた生徒への対応をしたりした。

〔運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援〕

運営指導委員会を各学期に1回開催し、SGL開発会議からの報告をもとに、学識経験者や教育学研究者、地域の有識者などから改善すべき点について指導を受けた。

〔類型毎の趣旨に応じた取組（グローカル型）〕

【JICA開発支援アラカルト講座】

世界各国での開発支援の内容を通して、課題の解決や多文化共生の実現などを考える講座をJICA関係者の協力を得て実施した。10講座を用意し、全生徒が学年に関係なく自分が興味のある国についての講座を受けることで、主体的に学ぶ姿勢を養うことにもなった。

【オンライン海外研修】

海外研修を実施できない代わりに、オンライン海外研修を4回企画した。6月にはカンボジアで貧困・地雷・教育について、7月にはシンガポールで多文化共生について、11月にはパラオで環境保全について、12月にはインドネシアで異文化理解と海外で働くことについて学んだ。現地からの生中継は臨場感があり、今までにないかたちの学びとなった。

【グローカル探究オンライン発表会】

地域との協働による高等学校教育課改革推進事業グローカル型の地域協働推進校・事業特例校・アソシエイト校から30校が集い、一般社団法人Glocal Academy理事長の岡本尚也氏を審査員長に迎えてGlocal High School Meetings 2022 全国高等学校グローカル探究オンライン発表会を文部科学省の共催によって開催した。Zoomを活用したオンライン形式で各校代表生徒の探究成果を発表し合うことによって、それぞれの地域での探究成果を共有する学び合いの場となった。

〔成果の普及方法・実績〕

毎授業後に、探究学習の様子を学校公式ホームページのブログで公表した。また、2年生の啓発素材開発物データと1､2年生の探究成果発表動画を学校公式ホームページで公表した。そして、3年生は探究レポート集を制作して成果を広報した。グローカル探究オンライン発表会では大会公式HPを設置し、各校代表生徒の発表動画を共有する場とした。

１１　目標の進捗状況、成果、評価

〔目標の進捗状況（目標設定シートの達成度）〕

【1-a 地域協働活動に参加する生徒の数】

対象コースの全生徒450人の地域協働活動への参加を目標にした。しかし、新型コロナウィルスのまん延防止と感染防止対策のため、3年生の参加を見送った。その結果、1年生と2年生の合計305人の参加となり、目標数値まで達しなかった。

【1-b 地元地域と隣接地域に進学する生徒の数】

30人以上の生徒が豊明市及び隣接する市（名古屋市を除く）に所在する大学に進学することを目標にした。結果は38名で目標を達成した。

【1-c 海外研修参加率】

参加率100％を目標にした。全員参加のベトナム海外研修を予定していたが、新型コロナウィルス感染症拡大により海外渡航が不可能になった。しかし、オンライン形式に切り替

えて、全生徒が 4 か国のオンライン海外研修に参加したため、目標を達成した。

【2-a 卒業までに生徒が参加する地元地域及び海外でのフィールドワークの回数】

3 年間で 5 回以上の参加を目標にした。1 年生に 2 回と 2 年生に 2 回、そして 3 年生で 1 回参加したので合計 5 回の目標を達成した。

【2-b 生徒活動発表会の年間実施回数】

年間で実施する生徒活動発表会の目標回数を 4 回とした。1、2、3 年生の各学年で 1 回ずつ発表会を実施した。また、全国高等学校グローカル探究オンライン発表会を開催したので、併せて 4 回となり目標を達成した。

【2-c 英語運用能力が CEFR の B1 以上の生徒の割合（2019 年度仰星コース入学生）】

50%以上の生徒が英検 2 級以上を取得するのを目標とした。1 年次終了時の取得率 10%から 3 年次終了時には 35%まで向上したが、目標値は達成できなかった。

【3-a コンソーシアム全体会の年間実施回数】

年間で 3 回以上実施することを目標とした。各学期に 1 回の実施を予定していたが、3 学期は新型コロナウィルスのまん延防止と感染防止対策のため中止になったので、2 回の実施ととどまり、目標を達成できなかった

【3-b 地域協働活動に参加する外国人市民と高齢市民の人数】

年間に 150 人以上が参加することを目標とした。今年度は合計 175 人の高齢市民と外国人市民が本校生徒との地域協働活動に参加したので、目標を達成した。

〔成果〕

第一に、現状の理解(Think Global / Think Local)・地域課題の発見(Think Local)・地域での情報収集(Act Local)・解決策の検討(Think Local)・実践と活動(Act Local)・まとめと発表というグローカル探究の学びのサイクルを確立することができた。第二に、地域協働コンソーシアムについて、地域課題のマッチング・課題解決へのコンサルティング・課題解決策のアイディア共有という役割を明確にすることができた。第三に、コロナ禍であっても全国の仲間とお互いの優れた探究成果発表を共有する全国高等学校グローカル探究オンライン発表会を開催することができた。

〔評価〕

生徒によるルーブリック自己評価表の集計結果から、年間の探究活動を通じて、主体性と協働性に関する自己評価値が高いことが明らかになった。このことから、地域との協働によるグローカル探究は、生徒が地域課題を自分事として捉えるようになるだけでなく、課題解決の実践者としての自覚が芽生える主体的・対話的で深い学びであると評価できる。

＜添付資料＞目標設定シート

１２　次年度以降の課題及び改善点

〔本事業に関する管理機関の課題と改善点〕

地域協働コンソーシアムを持続可能な共同体として存続させることが課題となる。そのために、コンソーシアム会議をコンソーシアム構成団体の代表者による会議から、実務担当者による会議へ変更していくことが求められる。また、地域との協働による学びに主体的に関わることが双方にとって Win-Win になるという意識を共有し続ける必要がある。したがって、地域との協働による学びのコンセプトを正確に共有することとお互いの負担が重くならないようにしていくことが大切になる。

〔研究開発にかかる課題と改善点〕

課題として残されたのは、海外研修の開発である。Act Global の観点から、多文化共生の実態を学ぶマレーシア・シンガポール研修と日本による開発支援の実態を学ぶベトナム研修を探究学習の一連の学びの中に組み入れることが求められる。また、コロナ禍では海外に渡航できなかったため、オンライン形式で各国からの生中継で研修を実施した。海外渡航が可能になっても、オンライン海外研修の実施を継続していく。

〔自走に向けた方向性〕

探究学習の実施を持続可能なものにするため、これまで土曜日に 2 単位で設定していた総合的な探究の時間を令和 4 年度入学生より木曜日 6 限に 1 単位に設定する。また、実施に係わる予算については、これまで管理機関が負担していた予算規模を維持する。そして、探究学習に係わる部署を引き続き存続させるとともに、他コースで始まる総合的な探究の時間のカリキュラム開発と実践についても担当するため、部署の規模をこれまでよりも大きくする。

【担当者】

担当課	星城高等学校	ＴＥＬ	０５６２－９７－３１１１（代）
氏　名	伊藤　泰臣	ＦＡＸ	０５６２－９７－２０１５
職　名	副校長	e-mail	ito.yasuomi@seijoh.jp